Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 海外プレ・インターンシップの教育効果に関する一考察 |
| Author(s) | 安藤, 由香里 |
| Citation | 大阪大学高等教育研究. 2015, 3, p. 55-62 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/51488 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪大学高等教育研究　3（2014），55−62

【教育実践レポート】

# 海外プレ・インターンシップの教育効果に関する一考察

安藤　由香里

# A Study of Effective Learning on International Pre-Internship

Yukari ANDO

This article focuses on effective learning through international internships. Internships are a relatively recent phenomenon where many public sector departments such as the Ministries of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Health, Labour and Welfare and Economy, Trade and Industry all support and encourage both undergraduate and postgraduate students undergoing internship. On the other hand, this practise has not yet gathered momentum in Japanese universities. One contributing factor for this may be due to the fact that the assessment of internship remains difficult and its effectiveness in learning is not well-recognised. This article proposes a hypothesis that self-assessment in international internships takes on an effective role rather than relative assessment. In addition, self-assessment also makes individual students motivated i.e. self-assessment may create self-motivation effectively.

Keywords : International Internship, Learning Abroad, Self-Assessment

## はじめに

平成26年4月8日，文部科学省・厚生労働省・経済産業省は，「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」の見直しを発表した．改正後，「大学等におけるインターンシップは，大学等における学修と社会での経験を結びつけることで，学生の大学等における学修の深化や新たな学習意欲の喚起につながるとともに，学生が自己の職業適性や将来設計について考える機会となり，主体的な職業選択や高い職業意識の育成が図られる有益な取組」[(1)] であるとした．また，インターンシップの意義では，新たに，大学等および学生にとっての意義について「大学等におけるキャリア教育・専門教育を一層推進する観点から，インターンシップは有効な取組である」[(2)] と加え，インターンシップの重要性を強調している．

これに先立ち平成19年3月29日の参議院文教科学委員会では，「教育研究における国際性の充実発展および日本で国際化に対応した社会貢献事業の展開等が大阪大学と大阪外国語大学の統合のメリットである」[(3)] と述べられている．同委員会では，「大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）が，国際協力および共生社会に関する研究を推進し，真の国際性を備えた人材を養成するために，教育プログラムを開発研究・実践する」ことが約されている．と同時に，「大学内の各部局および内外の機関との連携を行い，大阪大学と大阪外国語大学の両大学の特徴，持てる様々な教育研究の資源を最大限活用し，統合のメリットを日本国民に示す役目を担っている」とされている．こうしたミッションを背景に創設されたのが，海外実地体験型学習および実践を支援する「海外体験型教育企画オフィス（FIELDO）」である．FIELDOの目的は，大阪大学全学の学部生お

所　属：大阪大学グローバルコラボレーションセンター
Affiliation : Global Collaboration Center, Osaka University, JAPAN
連絡先：ando@glocol.osaka-u.ac.jp

よび大学院生を対象とした海外インターンシップや海外フィールドスタディ等を，学内の様々な部局と協力して企画し，グローバル人材，国際協力と開発の分野で活躍できる人材および共生社会の実現のために資する人材の育成をより一層推進することである．

本稿は，FIELDOのミッションの中でも，海外インターンシップおよび海外プレ・インターンシップを担当している経験から，その教育効果について考察を試みてみたい[4]．

## 1. 海外インターンシップ実施状況の外観

平成25年8月9日，体系的なキャリア教育・職業教育の推進に向けたインターンシップの更なる充実に関する調査研究協力者会議は，『インターンシップの普及及び質的充実のための推進方策について意見のとりまとめ』を発行した[5]．その中で，海外インターンシップについて，「グローバル人材育成の観点から，海外インターンシップのプログラムの開発・普及を推進する必要があり」，「リスク管理，学生へのフォローなど，国内インターンシップ以上に手厚い対応が必要である」[6] と述べられている．報告書中にあるインターンシップ全体のなかで，海外インターンシップの取扱いはわずかではあるが，とりわけ，文部科学省は，博士課程教育リーディングプログラム，世界展開力事業，スーパーグローバル大学等でグローバル人材育成に力を入れる傾向が顕著であり，今後ますます，海外インターンシップは注目されてくる分野であると考えられる．

上報告書で，「大学等において増加しつつある海外インターンシップについても，今回新たに調査対象としたところ，20.5％（大学数153校）の大学が実施（単位認定を行う授業として実施されたもののみ）し，参加学生の割合は0.08（学生数2,023人）となっている」と報告されている[7]．

表1は，体系的なキャリア教育・職業教育の推進に向けたインターンシップの更なる充実に関する調査研究協力者会議が調査した，海外インターンシップを単位化している大学，大学院，短期大学，高等専門学校の集計である[8]．

そこから以下が見て取れる．第一に，実施学校数及び実施率から，大学及び大学院の実施校はまだまだ少ないことが顕著である．69校の大学院が実施しており，実施率は11.1%，663人が参加学生数である．第二に，実施地域（体験学生数構成比）から，大学生及び大学院生の実施地域はアジアが他地域に比べて突出して高い．高等専門学校も同様の傾向である．他方で，短期大学だけが，北米が突出して高くなっている．第三に，海外インターンシップ実施先から，大学生は実施先の国の企業（日系企業以外）が最も多くなっており，次に，日系企業とNPOがほぼ並んでいる．そして，国際機関が0.7％と少ない理由は，大学生が希望したとしても，受入れ側の国際機関が条件を大学院以上としている場合が多いからだと推定される．あるいは，そもそも学生自身が国際機関でのインターンシップを「自ら」到底無理とあきらめて，挑戦すらしない可能性も否定できない．しかし，以下の国際機関は学年や年齢が限定されているものも含むものの，学部生を受け入れている．しかし，あまり知られていないことは残念である．その中で表2は，学部生インターンを受け入れている国際機関の一覧であり，外務省国際機関人事センターのHPに掲載されている．

**表1　海外インターンシップ派遣状況**

①実施学校数及び実施率

| 学校種別 | 実施校数 | 実施率 | 参加学生数 |
|---|---|---|---|
| 大学 | 153校 | 20.5% | 2,023人 |
| 大学院 | 69校 | 11.1% | 663人 |
| 短期大学 | 9校 | 2.6% | 76人 |
| 高等専門学校 | 30校 | 52.6% | 112人 |
| 合計 | 261校 | 14.8% | 2,874人 |

②実施地域　（%）

| 種別 | アジア | 北米 | 中南米 | 欧州 | 大洋州 | 中東 | アフリカ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大学 | 43.7 | 27.4 | 1.2 | 9.7 | 16.2 | 1.1 | 0.5 |
| 大学院 | 49.9 | 17.9 | 1.2 | 22.3 | 4.7 | 0.3 | 3.6 |
| 短大 | 14.5 | 50.0 | 0 | 6.6 | 28.9 | 0 | 0 |
| 高専 | 58.0 | 4.5 | 0 | 34.8 | 0.9 | 1.8 | 0 |

③海外インターンシップ実施先　（%）

| 種別 | 日系企業の現地支社・法人等 | 日本の公的機関の現地事務所等 | 実施先の国の企業又は日系企業の現地支社・法人等 | 実施先の国の行政機関、関連法人等 | 国際機関 | その他（NPO/NGO等） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大学 | 22.6 | 0.6 | 33.4 | 20.0 | 0.7 | 22.5 |
| 大学院 | 7.8 | 1.7 | 31.4 | 23.3 | 5.0 | 30.8 |
| 短大 | 51.3 | 0 | 48.7 | 0 | 0 | 0 |
| 高専 | 34.5 | 1.8 | 20.0 | 30.0 | 0 | 13.6 |

出所：体系的なキャリア教育・職業教育の推進に向けたインターンシップの更なる充実に関する調査研究協力者会議『インターンシップの普及及び質的充実のための推進方策について意見のとりまとめ』平成25年8月9日、24-25頁。

**表２　学部生インターンを受入れる国際機関**

| 略称 | 国際機関 | 期間 | 応募資格 |
|---|---|---|---|
| CTBTO | 包括的核実験禁止条約機構事務局 | 3-6ヵ月 | 学部生以上 |
| IAEA | 国際原子力機関 | 原則3ヵ月-1年 | 18歳以上＋学部2年間以上在籍 |
| ICC | 国際刑事裁判所 | 3-6ヵ月 | 学部生最終年以上 |
| IFAD | 国際農業開発基金 | 最大6ヵ月 | 学部生 |
| OECD | 経済協力開発機構 | 2-6ヵ月 | 学部生 |
| OIE | 国際獣疫事務局 | 3-6ヵ月 | 学部生以上 |
| UN Women | ジェンダー平等と女性のエンパワーメントのための国連機関 | 6週-6ヵ月 | 学部生（最終年） |
| WHO | 世界保健機関 | 6週-12週間 | 学部生以上（20歳以上） |

出所：外務省国際機関人事センター HP

大学院生の海外インターンシップ先は，大学生と同様に実施先の国の企業（日系企業以外）が最も多くなっている．そして，次にNPOがきており，日系企業は非常に少ないのが特徴である．国際機関は5.0%であり，大学生に比べ高くなっている．国際的なキャリアデザインのなかで，インターンシップが国際機関ポストのエントリーポイントとなる可能性が高いことを考えると，国際機関におけるインターンシッ経験者が少ないことは，日本の国連拠出分担金の割合に比べて日本人の国際機関職員が少ないことにつながるのかもしれない．外務省国際機関人事センターでは，日本人の国際機関職員を増やす取り組みと共に，インターンシップ情報を配信している[9]．また，外務省委託平和構築人材育成事業の後継として，外務省委託事業平成26年度国際機関向け人材育成研修コースが開始した[10]．筆者は本コースの一部にオブザーバー参加した経験があり，コース修了者を数名存じ上げている．国連ボランティアとして1年間，国際機関に勤務した後，JPO制度を利用して2年間国際機関に勤務する者が相当数いる．あるいは，国連ボランティア時代のネットワークを活用して，国際機関に勤めている者も相当数いる．インターンシップとは若干異なるが，ボランティアをエントリーポイントとしている点で，国際機関をめざす学生にとってインターンシップ類似のエントリーポイントといえるだろう．

## 2. GLOCOL海外プレ・インターンシップ

前セクションでは，日本の海外インターンシップ動向を概観したが，本セクションでは，GLOCOLの海外インターンシップ，特に海外プレ・インターンシップに絞って述べることとする．

GLOCOLでは，海外プレ・インターンシップ助成を2012年度から開始した．それに先がけて，海外インターンシップ助成は2011年度から始まった．海外インターンシップの対象は大学院生のみであり，期間は1ヵ月以上である．それに比して，海外プレ・インターンシップ助成は，学部生および大学院生を対象とし，期間は1ヵ月未満である点がインターンシップ制度とプレ・インターンシップ制度の大きな違いである．

海外プレ・インターンシップは，将来の長期的な海外インターンシップにつながる活動として位置付けられている．応募資格は，大阪大学に正規に在籍する学部生および大学院生である．もちろん国籍は問わないが，研究生および休学者は含まれない．助成額は渡航先に応じて決定するが，概ね航空運賃実費であり上限を15万円としている．例年12月下旬までに受入れ先が決定し，2月末までに開始する海外プレ・インターンシップが対象である．2014年11月現在までに助成を行った海外プレ・インターンシップ一覧は表3であり，GLOCOLのFIELDOのHPに報告書が掲載されている[11]．

**表３　海外プレ・インターンシップ派遣先**

【2014年度】4名

| 機関 | 国名 | 派遣期間 | 所属 |
|---|---|---|---|
| 日米学生会議 | アメリカ | 8/2～8/24 | 法学部国際公共政策学科 |
| OVAL Japan | 韓国 | 8/9-8/18 | 経済学部経営学科 |
| ジャパンタンザニアツアーズ株式会社 | タンザニア | 8/17-9/18 | 外国語学部外国語学科スワヒリ語専攻 |
| Ecole Polytechnique | フランス | 10/13-11/7 | 工学研究科電気電子情報工学専攻 |

【2013年度】10名

| 機関 | 国名 | 派遣期間 | 所属 |
|---|---|---|---|
| Bombay Leprosy Project | インド | 8/8-9/7 | 法学部国際公共政策学科 |
| OVAL Japan | 中国 | 8/11-8/20 | 外国語学部外国語学科英語専攻 |
| ジャパンタンザニアツアーズ株式会社 | タンザニア | 8/20-9/16 | 外国語学部外国語学科スワヒリ語専攻 |
| Bluebird Daycare Centre | カナダ | 8/22-9/4 | 人間科学部人間科学科 |
| JICAニカラグア事務所 | ニカラグア | 9/2-9/13 | 医学部医学科 |
| The Big Issue | イギリス | 10/15-11/8 | 外国語学部外国語学科英語専攻 |
| 国際ボランティア連絡会議 | コソボ | 10/27-11/4 | 法学部法学科 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| Bangladesh Rice Research Institute | バングラデシュ | 11/2-11/6 | 工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻 |
| パラオ保健省 | パラオ | 1/14-1/20 | 人間科学研究科グローバル人間学専攻 |
| Hajee Mohammad Danesh Science and Technology University | バングラデシュ | 3/11-3/15 | 経済学研究科経済学専攻 |

【2012年度】11名

| 機関 | 国名 | 派遣期間 | 所属 |
|---|---|---|---|
| United Nations Intensive Summer Program | アメリカ | 6/3-6/9 | 国際公共政策研究科国際公共政策専攻 |
| United Nations Global Compact China Network | 中国 | 8/6-8/24 | 国際公共政策研究科国際公共政策専攻 |
| ジャパンタンザニアツアーズ株式会社 | タンザニア | 8/14-9/6 | 外国語学部外国語学科スワヒリ語専攻 |
| メディア機関 | 中国 | 8/22-9/14 | 法学研究科知的財産法プログラム |
| ファーム・チルドレン・ヴィレッジ | カンボジア | 8/24-8/29 | 医学部保健学科検査技術科学専攻 |
| 国際稲研究所 | カンボジア | 12/27-1/11 | 経済学研究科経済学専攻 |
| 国際稲研究所 | カンボジア | 12/27-1/11 | 国際公共政策研究科比較公共政策専攻 |
| パラオ保健省 | パラオ | 2/15-2/26 | 医学系研究科医学専攻 |
| CIEE アメリカ・ボランティア | アメリカ | 2/25-3/22 | 外国語学部外国語学科英語専攻 |
| NPO法人CFF | フィリピン | 2/25-3/8 | 法学部国際公共政策学科 |
| NPO法人 Japan Heart | ミャンマー | 3/24-3/28 | 医学部保健学科看護学専攻 |

以上を見てお気づきかもしれないが，年度が異なり，同じ機関への派遣が数件みられる．これは，偶然ではなく，先輩から海外プレ・インターンシップの話を聞いた学生が，その機関に応募すると同時に，GLOCOL助成についても先輩から話を聞き，応募してくるからである．派遣する側からは，このような縦のつながりは，非常に望ましいと考えている．その理由は二つある．第一に，先輩から後輩へつないでいくためには自らの評価が，そのまま後輩の受入れの可否につながるという責任感を持ちながら，海外プレ・インターンシップを行ってもらいたいからである．第二に，教員からではなく，学生同士の生の情報共有が大変重要だと考えているからである．

## 3. 海外プレ・インターンシップ派遣の流れ（面接，事前面談，現地派遣，事後面談）

### (1) 面接

申請書は電子申請をした後，指導教員の押印がある原本の提出をして完了となる．申請書を検討して，要件に合致している場合，面接を行う．その際，面接評価シートに基づき，助成の可否を判断する．評価項目は，海外プレ・インターンシップの志望動機，海外プレ・インターンシップ先をどのように探したか，現地で予定している業務，予定している宿泊先，海外プレ・インターンシップを今後のキャリアプランにどのように位置付けているか，予定している航空運賃の額である．それらの項目について質問し，総合評価を行う．面接評価シートに基づき判断した結果を，FIELDOメンバー内で検討し，助成の可否の最終判断を行う．こうした流れが，面接から助成決定までの一連の流れである．

### (2) 事前面談（事前の自己評価シート）

海外プレ・インターンシップ派遣前には，必ず事前面談を行う．これは単なる金銭的な支援にとどまらず，教育的効果を担保するためである．また，リスク管理の上でも，非常に重要である．海外インターンシップと異なり，海外プレ・インターンシップは単位付与がなく，事前講義もない．そのため，創意工夫が必須であり，試行錯誤で始めたのが自己評価シートに基づく事前面談および事後面談である．海外派遣型教育の評価について，頭を悩ましている教員は多いと考えるが，筆者も例外ではない．そこで，評価につき，2つの仮説を立ててみた．第一に，学生自身の評価が第三者による評価よりも相応しいであろうという仮説，第二に，自らを評価することが学生のモチベーションになるのではないかという仮説である．

現在使用している事前の自己評価シートの質問は，5つの自由記述式と20つの5段階チェックから構成されている．自由記述方式の質問は表4である．

表4の5項目について自由記述で記入してもらい，それらの各項目の答えに基づき事前面談を行っていく．

その後，20項目について，①非常に優れている，②優れている，③普通，④不足している，⑤非常に不足している，の5段階チェックをしてもらい，良くも悪くも突出している点について質問を投げかけていく．その項目のうち，例えば，⑤非常に不足している，を選択した項目について，どうしてそのような自己評価をしたか

【自由記述】
1) なぜ海外プレ・インターンシップに参加したのですか。
2) 本プレ・インターンシップ参加の前と後で、自分自身の何が変わることを期待していますか。自己目標とその指標を設定してください。
3) 期待（自己目標）は、自分の研究やキャリアとどのような関連がありますか。
4) 本プレ・インターンシップでどのような貢献ができますか。今までの経験から貢献できることを具体的に書いてください。
5) 本プレ・インターンシップで新しく挑戦したいことを具体的に書いてください。

【5段階チェック】
以下の項目に次の5段階で答えてください。①非常に優れている、②優れている、③普通、④不足している、⑤非常に不足している。
1) 学問的知識を実際問題に活用する力
2) 決断力、判断力、優先度決定力
3) 新しいものへ挑戦する姿勢
4) わからないことを質問する姿勢
5) 他人の言葉を傾聴する姿勢
6) 問題を理解・把握し、問題を発見する力
7) 他の人と連携や協働して計画し実行する姿勢
8) 創造性、新しいアイデアを生み出す力
9) 専門分野での知識、技能
10) 忍耐力、向上心
11) 母国語でのプレゼンテーション能力
12) 母国語でのコミュニケーション能力
13) 実践英語力（会話、文書作成、英語による思考）
14) 異文化理解、多様性の受容
15) ジェンダーの理解
16) 積極性、リーダーシップ
17) 大学での学習、研究に対する意欲
18) 専門家としての自信
19) 働くことへの意欲、具体的将来像
20) ライフワークバランスの展望

**図１　事前の自己評価シート**

1) 現地到着のメール連絡
2) 現地滞在先の環境（特にセキュリティー）、移動手段
3) 現地携帯番号があれば連絡
4) 業務の内容
5) 基本的に週1回メール連絡
6) 実習中に滞在先から離れて宿泊する際は事前に連絡。出張も同じ。日帰りでも国境を超える場合は事前に連絡
7) 日本大使館（領事館）の場所確認
8) 個別相談があれば時間に関係なく、いつでもメール、電話、スカイプで連絡する。
9) アルコールを飲みすぎないなど、通常よりも体調管理に気を配る。
10) 帰国前の現地出発前にメール連絡
11) 日本到着後にメール連絡
12) 報告書提出（一ヵ月内めど）、報告会を企画する場合は報告をお願いするかもしれない。
13) 大阪大学の他助成を受けていない。

報告書の項目

A4版word横書き
1) 準備編
この「インターンシップ」の受け入れ先を知ったきっかけ及び志望動機、出発前までの準備について。
2) 実習編
現地で行った活動について。
3) 振り返り編
今回の経験を通じ学んだこと、今後、研究にどのように活用できるか、またはキャリア選択にどのような影響を与えたか。
4) 生活編
どのような滞在先で過ごし、食事等はどうしたか、セキュリティー面の体制はどうであったか。
＊報告書には、可能なかぎり写真も挿入し、後輩が具体的に想像できる参考資料となることが望ましい。
＊報告書はGLOCOLのウェブサイトに掲載する（記名、無記名を選択可能）。

**図２　事前面談チェック事項**

をひとつひとつ確認し，本海外プレ・インターンシップ中に特に自身で気をつけるように喚起を促すようにしている．

さらに，海外派遣中のリスク管理を担保するために，海外プレ・インターンシップ事前面談チェック項目として，表5のチェック項目について確認する．また，帰国後の報告書は学生自身の振り返りおよび後輩への情報提供という2点から以下の項目について提出を義務付けていることを説明する．

### (3) 現地派遣（リスク管理体制）

『インターンシップの普及及び質的充実のための推進方策について意見のとりまとめ』で述べられているように，国内インターンシップ以上に手厚い「リスク管理」と「学生へのフォロー」が必要である．国内とは社会・文化背景が異なることはさながら，治安が日本ほど良い国はないからである．海外で「ひやっ」とする場面を目撃したことが何度かある．「日本のように」ズボンの後ろポケットに財布をいれている日本人の男性である．また，バッグの口があいた鞄に財布が顔を覗かせている日本人の女性も同じである．日本では「普通」に行っていることが，海外では「盗ってくれ」と言っているも同様になるかもしれない「常識の違い」について意識することが，事前に事故等を防ぐ知恵になる．これらの知識は知っていなければわからない．そして，言語の壁や物理的な距離があることも，メンタルヘルスの面で，海外インターンシップの方が国内インターンシップよりも手厚くフォローしなければならない理由のひとつであろう．他方で，そのような大きなギャップがあるからこそ，学生の海外での学びは大きいとも考えられる．しかし，その学びを得るためには，リスク管理を徹底して，安全に帰国してこそであることは言うまでもない．

学生自身がリスク管理の意識を持つことは非常に重要である．と同時に，GLOCOLのリスク管理体制は，不測の事態に教職員が敏速に対応できるように工夫がされている．まず，24時間体制でいつもつながるインター

ンシップ用公用携帯を教員が1台，職員が1台持っている．その携帯番号，現地の日本大使館（領事館）の電話番号，法人危機管理会社の電話番号を名刺の大きさにした，緊急カードをラミネート加工して学生に渡し，常に持参するように指導している．また，原則として1週間に1度は学生から安否確認の電子メールを送ってもらい，プレ・インターンシップ業務の進行状況のみならず，体調や生活環境等の状況を確認する．電子メールの宛先は個人宛てではなく，関係する教職員が複数登録されているメーリングリスト宛てである．こうすることにより，万が一，担当教員がメールを確認できなくても，気づいた者がすぐに動ける体制を整えている．不測の事態は初動が大変重要になるからである．また，教職員がリスク管理シュミレーションを実施し，不測の事態に敏速に動けるように訓練を行っている．

### (4) 事後面談（事後の自己評価シート）

海外での学生の学びを定着させるためには，振り返りが効果的であると考えられる．そのひとつの方法として，事後の自己評価シートを利用している．事前面談で実施した事前の自己評価シートと同じ項目について，学生自らにどのような変化があったかを自己評価させる方法である．自由記述式には，表6の項目を書くようになっている．そして，以下にあるように，事前の自己評価シートと対応した項目について，①非常に改善された，②やや改善された，③変わらない，④悪化した，⑤非常に悪化した，の5段階チェックを行ってもらう．本来であれば，事後面談の数日前に送付してもらいたいのだが，直前に送付してくるあるいは持参する学生もおり，その場での対応を迫られる場合が少なくない．

## 4. 自己評価シートによる学びの評価

事前面談では，面談前に記入してもらった事前の自己評価シートで「非常に不足している」をマークした項目についてその理由を尋ねることは既に述べた．そして，海外プレ・インターンシップ中にその項目について特に念頭に置くように伝えることも既述のとおりである．事後面談では，事後の自己評価シートで「非常に改善された」項目を中心にその理由を尋ねながら，海外プレ・インターンシップ中の出来事や印象深かったことを聞いていく．こうした事前および事後面談の中で，キャリア・コンサルタント資格を取得したことが大変役に立っていると感じることがある．

【自由記述】
1) 海外プレ・インターンシップで一番印象に残っていることは何ですか。
2) 本プレ・インターンシップ参加前に、期待したこと（自己目標）はどの程度達成されましたか。自分で設定した指標で示してください。
3) 参加前に考えていた期待（自己目標）と研究や将来像との関係の考え方に変化はありましたか。その理由も併せて書いてください。
4) 本プレ・インターンシップで貢献できると考えていたことは達成されましたか。その理由も併せて書いてください。
5) 本プレ・インターンシップで新しく挑戦できたことと今後挑戦していきたいことを具体的に書いてください。

【5段階チェック】
以下の項目に次の5段階で答えてください。①非常に改善された、②やや改善された、③変わらない、④悪化した、⑤非常に悪化した。
21）学問的知識を実際問題に活用する力
22）決断力、判断力、優先度決定力
23）新しいものへ挑戦する姿勢
24）わからないことを質問する姿勢
25）他人の言葉を傾聴する姿勢
26）問題を理解・把握し、問題を発見する力
27）他の人と連携や協働して計画し実行する姿勢
28）創造性、新しいアイデアを生み出す力
29）専門分野での知識、技能
30）忍耐力、向上心
31）母国語でのプレゼンテーション能力
32）母国語でのコミュニケーション能力
33）実践英語力（会話、文書作成、英語による思考）
34）異文化理解、多様性の受容
35）ジェンダーの理解
36）積極性、リーダーシップ
37）大学での学習、研究に対する意欲
38）専門家としての自信
39）働くことへの意欲、具体的将来像
40）ライフワークバランスの展望

**図3　事後の自己評価シート**

「キャリア」とは，単なる仕事だけではなく，「人生」そのものであり，キャリアデザインとは，その人の人生をデザインしていく作業であるからだ．学生が自分で考えることはもちろん重要であるが，それを支援する環境があることは学生自身の学びのためにも良いように思う．

学生の学びや気づきは，それぞれの派遣先や海外プレ・インターンシップの形態にもよるが，概ね，他人の言葉を傾聴する姿勢，忍耐力・向上心がプラスに動いたと自己評価する学生が多い．これは，学生としてではなく，「社会人として」業務をこなす中で，他人の言葉を聴いて，業務を円滑にすすめることの重要性を見出したことを意味する．また，時には自らの意に沿わないことがあっても，我慢して，業務をこなすことができたと自らを評価する学生も少なくない．そして，業務を通して，自らの知識不足を実感し，語学能力の不十分さを実感して向上したいと考えるようになる学生も多い．

## 5. 大阪大学にあったらよいもの

プレ・インターンシップの事後面談のなかで，学生から聴取した「大阪大学にあったらよいもの」は以下3つである．

### (1) 日本語でのプレゼンテーションスキルのクラス

1年生の必須教養科目として，日本語でプレゼンテーションのスキルを学べる授業が欲しいという意見を聞いた．日本・韓国・中国の3ヵ国の学生が3人一組でグループを作り，毎年持ち回りで3ヵ国のどこかで行っているビジネスコンテストに参加した学生から2年連続で同様の要望を聞いた．現在，大阪大学で開講されているのは英語Speaking授業の中に，担当教員によってはプレゼンテーションを行うものがあるということだった．しかし，まず，日本語でのプレゼンテーションに特化した授業が大学生活の早い時期に欲しいということであった．

### (2) 英語でのプレゼンテーションスキルのクラス

日本語でプレゼンテーションができるようになった後，英語でプレゼンテーションができるようになりたいということであった．これは将来の学会発表にも役立つスキルであると考えられる．

### (3) 日本人学生と留学生と交流できる大きな寮

大学生活の中で，留学生との交流機会があまり多くなく残念だとしばしば耳にする．日本人学生と留学生が共に生活する大きな寮があれば，普段から異文化理解をする機会となるのではないか．海外プレ・インターンシップ中に業務中のみならず，日常生活においても異文化理解をする機会が多々あったことからの経験に基づく意見であると思う．筆者が留学中を振り返ってみても，現地学生との交流機会は何かきっかけがないと少なかった．他方で，留学生同士は，寮での時間を通して仲良くなる事例が多かったように思える．

本要望については，大阪大学がスーパーグローバル大学に採択されたことにより，その構想案にある，グローバルビレッジが設立されれば，実現されるのであろうか．グローバルビレッジのイメージで最も近いのが，パリ留学中に滞在した，パリ国際大学都市であろうか[12]．図書館が充実しており，夜遅くまで開いている．数件の学食及びレストランがあり，学生から研究者まで様々な国籍，年齢がまさに共生しており，多様性に富んでいる．週末には各国館で催しものがあり，言語コースも提供されている．ドイツ館で開催されているゲーテ・インスティチュートのドイツ語コースは，かつて各国で様々な言語コースに参加した中で，最高のクラスメートが集まり，非常に楽しく学ぶことができた．フランス人，レバノン人，イタリア人，ニカラグア人，コロンビア人等で本当に楽しい思い出である．

## おわりに

以上，筆者がGLOCOLに2011年に着任して以来，4年間のFIELDOでの活動，特に海外プレ・インターンシップに絞って見てきた．グローバル人材の問題はその中身であるが，海外プレ・インターンシップに限定すれば，学生自らが自分の良いところ，悪いところを正当に評価できるようになり，良いところを伸ばし，悪いところを努力するモチベーションの燃料だと考える．そして，それはあくまでも過程の一通過地点での経験ではあるが，影響が大きいと学生自らが評価することが重要である．というのは，過小評価も過大評価も自らの成長を止めてしまうからである．

したがって，現時点での暫定結論としては，海外プレ・インターンシップの教育効果についての2つの仮説，第一に，学生自身の評価が第三者による評価よりも相応しいであろうという仮説，第二に，自らを評価することが学生のモチベーションになるのではないかという仮説について客観的な指標を提示することは困難であった．しかし，学生自身の主観的な評価を通して，学生自らに，学びや気づきの機会を提供していることは否定できない．そして，その機会は国内でよりも「海外」という環境要因を通して，大きく学生自身に作用している事例が蓄積してきた．

第三者が評価する相対的評価は海外インターンシップの文脈ではそぐわないことも面談を通して感じることが多かった．例えば，自分の英語力は素晴らしいと思っている学生Aよりも，自分の英語力は全然ダメですと言っている学生Bの方が，第三者の目から見たら英語力の評価が高い場合がそれに該当する．そうした相対的評価よりも，他人と比較するのではなく，学生A自身がどれぐらい成長するかを，事前の自己評価及び事後の自己評価という指標を使用することが最も相応しいと考えている．つまり，第一の仮説を確信する事例が蓄積されてきたと言える．また，学生に自己評価をさせることは，自己認識を明確にする効果が高く，自己効力感を増やす機会となることも，海外プレ・インターンシップの事前面

談及び事後面談を通して日々，感じている点である．換言すれば，第二の仮説についても，自己評価がモチベーションを上昇させるという事例が蓄積されてきたと言えるのであろう．

受付2014.11.21／受理2015.02.09

**注釈**

(1) 文部科学省・厚生労働省・経済産業省『インターンシップの推進に当たっての基本的考え方 新旧対照表』平成26年4月8日http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2014/04/18/1346604_02.pdf（2014年9月4日最終閲覧）

(2) 同上

(3) 第166回国会参議院文部科学委員会会議議事録6号，平成19年3月29日，2-3頁.

(4) 筆者は国際法を専門とするが，海外インターンシップを担当し始めてから，専門性を高めるためにキャリア・コンサルタント資格を個人で取得した.

(5) 体系的なキャリア教育・職業教育の推進に向けたインターンシップの更なる充実に関する調査研究協力者会議『インターンシップの普及及び質的充実のための推進方策について意見のとりまとめ』平成25年8月9日http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/055/gaiyou/__icsFiles/afieldfile/2013/08/28/1338222_1.pdf（2014年11月14日最終閲覧）

(6) 同上14頁.

(7) 同上3頁.

(8) 同上24-25頁.

(9) 外務省国際機関人事センターhttp://www.mofa-irc.go.jp/shikaku/keiken.html（2014年11月18日最終閲覧）

(10) 外務省委託事業平成26年度国際機関向け人材育成研修コースhttp://www.tac.biz/kokusaikikan/（2014年11月18日最終閲覧）

(11) http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/fieldo/intern_list.html（2014年11月14日最終閲覧）

(12) http://www.ciup.fr/（2014年11月13日最終閲覧）